

平成26年度 第1回 桑名市子ども・子育て会議 議事録

日 時	平成26年4月4日(金) 午後1時から午後3時30分ごろ
場 所	桑名市役所 5階中会議室
出席委員	伊藤香、稲垣陽子、大橋了子、奥田聖人、加藤隆明、下間賢了、高橋恵美子、津田浩二、中谷直子、野口典子(◎)、濱内洋孝、松岡典子(○)、水谷秀史、横山悦子、渡部美紀子(敬称略、五十音順)(◎:委員長、○:副委員長)
傍聴人数	5人
会議次第	<ol style="list-style-type: none">1. 開会2. 議事<ol style="list-style-type: none">(1) 計画に記載する「量の見込み」について(資料1)(2) 桑名市子ども・子育て支援事業計画(仮称)の柱立て等の検討について【グループワーク】(資料2)3. その他4. 閉会

1. 開会

(野口委員長)

こんにちは。年度初めのお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。この会議は、今年度中に計画書として取りまとめなければならないので、よろしく願います。

※ 議事の前に、前回会議での指摘を踏まえ、病児保育の利用状況などについて事務局説明

2. 議事

(1) 計画に記載する「量の見込み」について（資料1）

※ 資料に基づき事務局説明

(野口委員長)

「量の見込み」がこの会議の一つのカギになるが、ご説明いただいたように、これは桑名市独自の設定ではなく、国の手順に従って算出する仕組みになっている。また、実績に基づいて中間年に調整することが予定されている。そして、直近の実績を踏まえて、「量の見込み」に対する検討を踏まえる必要がある。これまでに実施されたニーズ調査に基づいて算出することになるが、もう1つのファクターとして地域をどうするか。桑名市全域、合併前の旧自治体、中学校区・小学校区といった生活圏域などを考えて、各事業の「量の見込み」を出していただいた。これまでの議論に学童保育もあげられたが、事務局からは小学校区・中学校区の2つの案を出していただいた。桑名市は地域によって居住条件に偏りがあるため、小学校区で算出するとゼロになってしまう学区も出てくる。学童保育の直近の利用は460人という数字だが、各学区の見込み量を合計すると652人、現在の1.4倍となっている。学童保育については、今後1.4倍の整備が必要という数字になった。ここまでに、委員の皆さんからご意見を頂戴したい。

(水谷秀史委員)

表の見方を教えてほしい。低学年・高学年の概念の説明と、この展開をどのように理解すればいいのか教えてほしい。

(事務局)

低学年・高学年は国の手引きにも示されており、一般的には低学年の放課後児童クラブのニーズは高く、高学年になると低くなると言われている。低学年は1～3年生、高学年は4

～6年生という区分けで、それぞれ算出している。

(加藤委員)

放課後児童クラブの「量の見込み」に、放課後子ども教室は加味されているのか。

(事務局)

国の方針に従って、放課後児童クラブの「量の見込み」のみ算出している。

(野口委員長)

最終的に学童保育が一番難しい部分になると思うが、現状ではこのような推計値としてご承知おきいただきたい。

(事務局)

この「量の見込み」は、事務局から県に報告させていただく。

(下間委員)

資料に地域ごとのニーズの多い少ないがあるとわかりやすい。

(事務局)

ニーズ調査報告書を近々まとめることを予定しており、利用意向の割合は地区ごとに算出するので、そちらをご参考にしていただければと思う。

(加藤委員)

放課後子ども教室を実施している学校はどこか。

(事務局)

精義、大和、藤が丘、星見ヶ丘、多度東、多度青葉、伊曾島の7小学校。

(加藤委員)

放課後児童クラブと放課後子ども教室の内容、関わり、ニーズ的なものをどういうふうに関わり取られているのか。

(事務局)

放課後子ども教室は、そもそも開設されている日数など、放課後児童クラブとは異なっている。放課後子ども教室は週1～4回と地域によって開催回数も異なり、共働き家庭を支援するという位置付けとは若干異なっている。また、放課後児童クラブは、子ども・子育て支援法で消費税財源を基に行う事業として整理されており、手引きでもニーズ量を算出するよう求められているが、放課後子ども教室は除外されている。次のステップとして確保方を検討していくことになるが、その段になって放課後子ども教室との兼ね合いなども含めて検討していくことになると思う。次回の会議以降、引き続きこの提供体制については検討課題と思っている。

(加藤委員)

放課後児童クラブと放課後子ども教室を市民が混同しないよう、表記には気を使ってほしい。

(濱内委員)

放課後子ども教室が実施されている小学校がすべてではないのは何故か。

(事務局)

実施主体がボランティアであり、コーディネーターを設置して、その方々を中心に開催している。実施していない地域では、そういうご要望がない、ご要望があってもボランティアがいないなどが要因となっている。

(濱内委員)

開催時間等はどれくらいか。

(事務局)

開催日数は週1回または土曜日など、時間は基本的に16時または17時、長い所で17時まで。

(濱内委員)

伊曾島地区の「量の見込み」がゼロとなっているが、実際には、現在4人程度が長島の学童保育に通っている。ニーズ調査の関係で見込まれていないのか。

(事務局)

ニーズ調査の結果から算出すると、このような結果であった。

(津田委員)

放課後子ども教室の内容、回数等に関する一覧表を、次回の会議資料として提供してほしい。

(事務局)

次回の会議で準備したい。

(野口委員長)

それでは次の議題に移る。

(2) 桑名市子ども・子育て支援事業計画（仮称）の柱立て等の検討について【グループワーク】（資料2）

※ 資料に基づき事務局説明

【グループワーク】

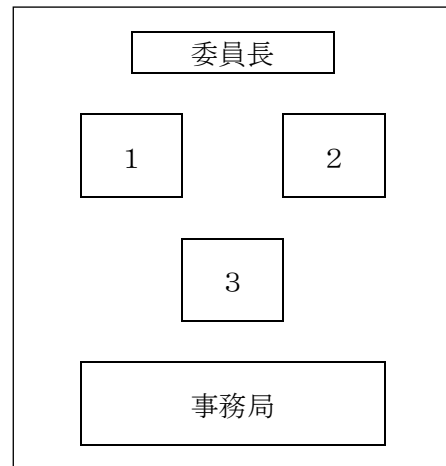
委員が車座になるよう席を配置変えし、各グループに分かれて検討を開始。

第1グループ：伊藤香、大橋了子、下間賢了、
中谷直子、水谷秀史、渡部美紀子

第2グループ：奥田聖人、高橋恵美子、濱内洋孝、
松岡典子

第3グループ：稲垣 陽子、加藤隆明、津田浩二、
横山悦子

(五十音順、敬称略)

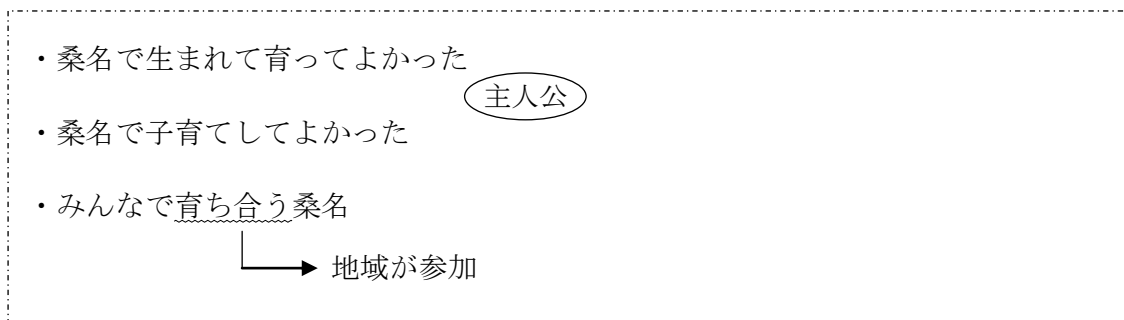


【発表（意見概要）】

■ 1グループ

- ・どのような桑名のまちにしていきたいかという視点で検討した。
- ・1つ目は、子どもが成長してきたときに、桑名で生まれて育ってよかったなと思える、そんな桑名のまちにしていきたい。そのためにどんな支援が必要か、医療の面などがたくさん入ってくると思うが、子どもの目線で考えたい。
- ・2つ目は、桑名で子育てできて良かったなという親の目線。子育てには大変なことが多いが、子育てを楽しめるまちをつくっていきたい。
- ・3つ目として、子育てだけではなく、みんなが子どもたちと関わることで、子育てを応援することで、自分自身も育っていけるような、子どもから高齢者まで育ち合っていけるようなまちにしていきたい。

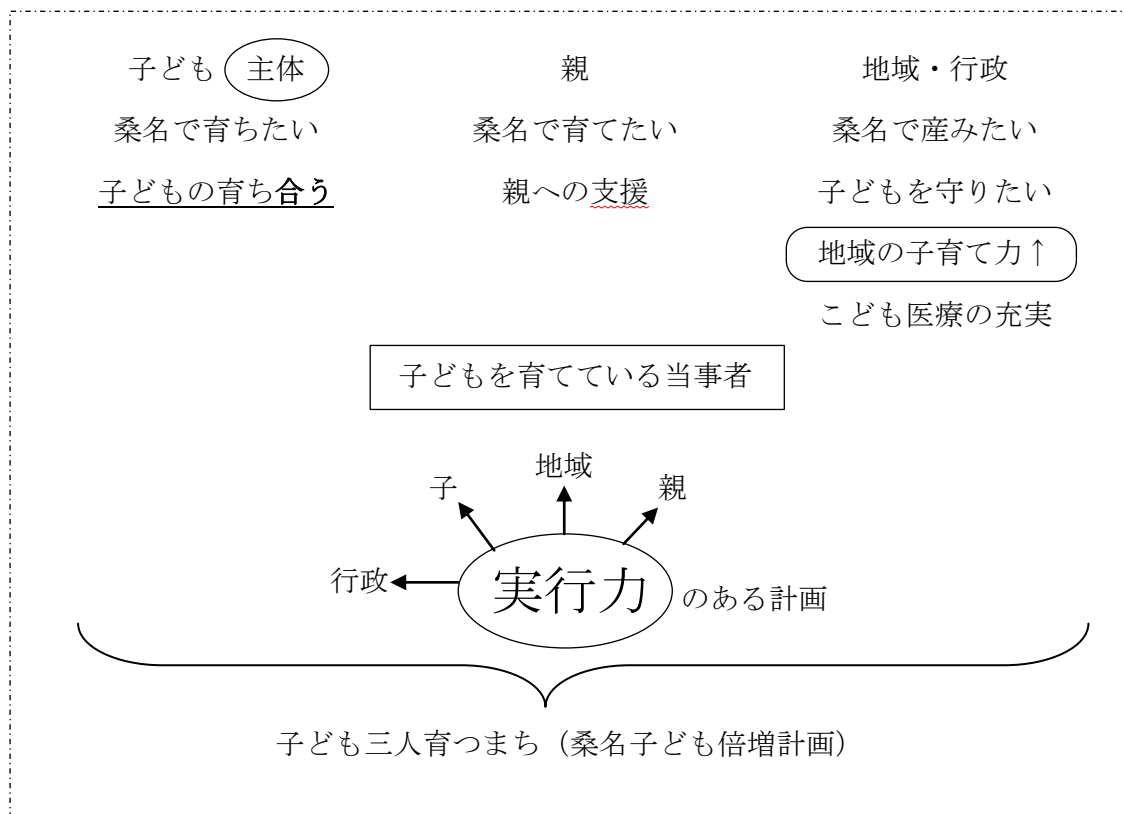
図表1 1グループの検討内容



■ 2グループ

- ・事務局職員にも意見を出していただいたが、次回からは教育部長や福祉部長にもグループワークにご参加いただけると、桑名市のトップの方々がどのように考えているかがわかり、本来の意味で市民と協力した子ども・子育て会議になると思う。
- ・子どもを主体とした考え、親への支援、地域・行政の気運の熟成に分けて検討した。
- ・子ども目線で見れば桑名で育ちたい、親目線で見れば桑名で育てたい、地域・行政全体としては子どもを守りたいということで、地域の子育て力の向上を盛り込んだ。
- ・細かいテーマとして、こども医療の充実を書き込んだ時点でタイムオーバー。
- ・大筋としては、市長の公約にもあった子どもを3人育てられるまち。

図表2 2グループの検討内容



(濱内委員)

基本理念は大事だが、これで終わってしまうときれいごとでしかない。今回の参考資料3-1および3-2には、何かしら関係部署からのレスポンスがあっても良いにもかかわらず、事務局の回答が一切書かれていない。貴重な意見を出した市民に対する行政としての責務を果たしていない。意見を出した市民からは「結局どうなったの」という意見が出てくると思うので、ぜひご回答いただきたい。

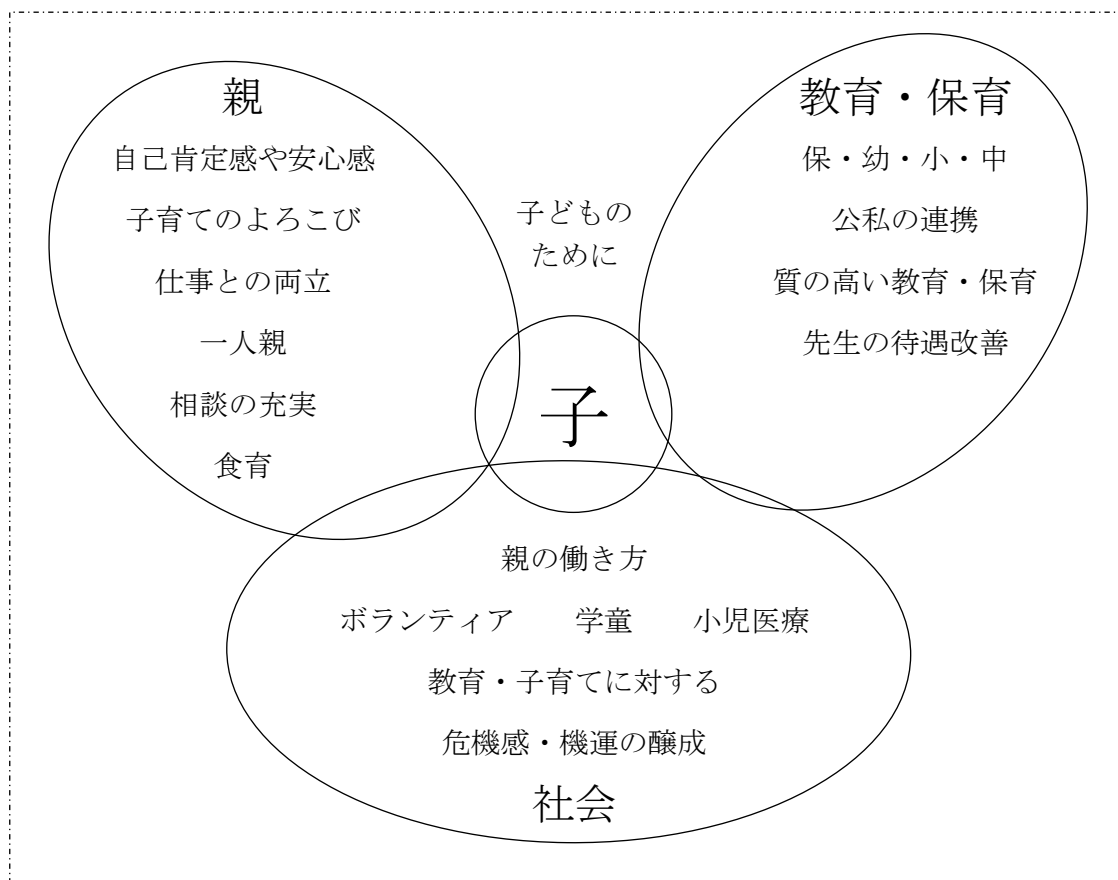
(事務局)

当然こちらにも考えがあるので、回答させていただきたいと考えている。

■ 3 グループ

- ・柱立てを検討する前に、子どもを真ん中に据えることを確認し合い、親、教育・保育、社会の3つのグループで検討した。
- ・教育・保育では、各連携がうまく進んでいないという意見が多かった。

図表3 3グループの検討内容



(野口委員長)

ありがとうございました。グループワークの検討内容や報告を聞きながらまとめると、どのグループにも共通しているのは、まず子どもが主人公でなくてはならないという考え方。子どもがどうであるか、子どもにとってどうであるか、ということなので、この計画は、子どもが主体あるいは主人公のどちらの

図表4

- ①子どもが主人公の計画であること
- ②子育てを楽しむことができる
↑
支援
- ③社会資源・環境・条件を丁寧に整備する

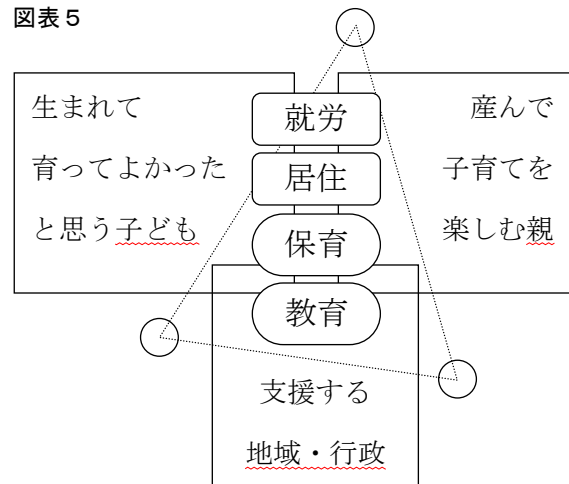
言葉が的確なのかはわからないが、子どもが子どもらしく、子どもとして、親の前に子ども自身が自己肯定感を持って、子どもとして成長していくことを支えていく計画であること。これは私見だが、日本の子どもたちは、子どもらしく子どもの時期を過ごす時期がとても短いし、子どもらしく暮らし、子どもらしくお互いに育ち合い、友達をたくさん作り、友達とたくさん楽しみ、そして色々な知識や体験をしながら子どもという時期を十分に楽しんで生きていく時間と環境が十分にあるとは思えない。すぐに大人になってしまう。大人っぽくなるのが成長だというふうに大人たちが期待し過ぎている。だとすると、子どもの時期を十分楽しんで、子どもたちが子どもたち同士で育ち合う、それがたぶん皆さんが言う主人公の意味だと思う。そのためには、保育や教育が十分受けられることが大事だと思う。保育の部分では、急いで色々な知識を詰め込むよりは、もっと体験して、転びながら危ないということ体験して育っていくことが求められると思う。そういう意味では、子どもが主人公の計画であるということが皆に共通していると認識できたと思う。その時に大事なものは、親が子どもを育てることが基本線だが、親だけが子どもを育てるというわけではないこと。親は子どもを育てるが、親だけが苦勞して、悩んで、失敗が許されないような子育てをする必要はない。親だって悩んで、苦しんで、色々大変な経験をするが、親だけが子どもを育てるだけではなく、もっと違う視点が入っていい。つまり、子育てをしている親を支援することが大事ということも皆さんに共通している。その結果何を生み出したいかということ、子育てを楽しむことができるということが許される地域、社会、あるいは桑名。子どもを育てたり、親の介護をしたりするとき、「大変なんです」という言葉が日本では最も通用する。「子どもを育てていて大変なんです」「親の介護をしていて大変なんです」という言葉が一般的で、「大変なんです」と言ってお互いに慰め合うことが何となく風潮になっているが、「子育てしていると楽しいんです。だから仕事を少々セレクトしてもいいじゃないですか」という話になると思う。今まではそんなことは許されなかったが、そういう意味では子育てを楽しむことができる、そして、それを支援することがこの計画に盛り込まれていなければいけないということになる。そうすると、子どもが子どもらしく育つということをまず主体にする、そして子育てをしている親たちもそれを楽しむ。だとしたら、そこに必要なだけの社会資源・環境・条件を丁寧に整備していく必要がある。一つひとつのニーズを確認しながら。たぶんこれが皆さんがグループワークで導き出したコンセンサスだと思うが、何か違いや足すもの等があれば発言をお願いしたい。

先程私は丁寧にと言ったが、実行力のある計画にしなければ意味がない。それは行政

も実行力を持たなければいけないが、子ども自身も、親自身も、地域自身にも求められる。そうしなければ何にもならない。行政はできることとできないことを整理する必要があるし、あるいは行政がやるよりも地域でやった方がいいということも整理する必要がある。これを整理しておかないと、委員会と行政と市民が分断されてしまう。実行力は行政だけに求められるわけではないので、もしかしたら子ども自身にもやらなければいけないことが出てくるかも知れない。

今日は基本目標の検討となっていたが、これは基本理念になると思う。そうすると、この3つの局面別で分科会を組むことも1つかも知れない。子ども自身が生まれてよかった、育てよかったと思えるためには、どんなことをやらなければならないか。あるいは、子育てを楽しむ、産むということについて、親たちが迷いなく進めていくためにはどうすればいいか。そういうものを

図表5



をサポートするための地域や行政は何をすべきなのか。具体的な施策・事業になるとダブってくることもあると思うが、それは後でシャッフルしていけばいい。各領域の中にはもっと大きな問題があり、社会全体の雇用・就労の問題、居住をめぐる居住福祉や住宅政策などの社会政策や社会保障、社会全体のもっと大きな問題が入ってくる。しかし、実際に各領域を結んでいくときには、保育・教育という具体的な制度があり、実践がある。皆さんのグループワークや発表を聞いてまとめただけが、ご意見があればお願いしたい。何故分科会を作ろうとしているかという、今後桑名市は何をすればいいのかを落とし込んでいく作業のため。その際に、市民から寄せられた意見に対する回答が必要になる。行政はやるつもりなのか、やらないのか、やれないのか、これをはっきりさせる必要がある。そうすると、本当にやるべきこと、やらなければいけないことが何なのか、具体的な施策・事業として見えてくる。議論しなくても今すぐにできてしまうことは、計画の中に盛り込まなくてもいい。少なくとも5年間で桑名市がやること、やらなければならないことを整理していく。そのための作業を3か月かけてやっていただきたい。

(濱内委員)

行政職員は、市民の要望に対して、何かにつけてできない理由を付けるのが上手い。

どうやって市民の要望を実現するかではなく、どうやってできない理由を納得してもらうかを考えている。できない理由を並べるのではなく、どうやって実現していくかを考えることがこの会議の役割だと思っている。行政ができない理由を出したとして、それが本当に財源がないからできないものであったとしても、どのように実現していくかを考えることが必要。認定こども園や幼保一元化にしても、そういうのが必要だと思う。逆に行政がやろうとしていることが正しいのか、ニーズ調査の結果から拾う必要がある。こども園を推進することが前提となっているが、中には幼稚園を保育園化するべきだという意見もあった。それらも含めて分科会で決めていくことが求められていると理解している。

(野口委員長)

委員長という立場は取りまとめ役なので、皆さんの意見をお聞きしたい。行政と対立することが私たちの主旨ではない。行政としてやるべきことは何で、できるのは何処までで、できない理由は何なのかをはっきりさせるのが行政の仕事になる。そして、行政ができないことをできるようにするためにはどうしたら良いのかは、この会議で考えていかなければいけない。だから丁寧に整理する必要があると考えている。それには少々時間がかかるので、この1年でできるかどうかかわからないが、少なくとも丁寧に整備していくためには、計画自体にこれらのことが盛り込まれていなければならない。実効性の高い計画にしようというのがコンセンサスにないとダメだと思う。

(奥田委員)

この会議の最終目標がわからない。実効性があるということは、最終的に目標値を設定しなければいけないのか。

(事務局)

ニーズ調査に基づくものや法定の「量の見込み」については、ある程度数値を設定していただくことになる。それ以外の支援については、どういう示し方が良いのかをご検討いただくことになると考えている。

(野口委員長)

「量の見込み」についてどこまでやるべきかということと、今桑名が即刻できることと数年先にできることは整理できると思う。しかし皆さんが、すぐにやろう、やらなければいけないと判断した場合には、その方法論を考えなければいけない。行政だけですべて解決できるわけではないので、その方法論までこの計画の中で議論する必要が出てくるが、今度は時間との勝負になると思う。ただ、今まで次世代育成支援でやってきた

範囲でいえば、計画期間中に修正しながら進めてきた。計画を作った後にも継続させないといけないことを計画に盛り込む必要がある。そういう意味では、この会議で方向性を確認する必要があるし、時間をかけて分科会で審議・検討していくことも大事だと思う。その作業にはある程度のテーマが必要になると思ったので、基本目標として本日も検討いただいた。

(松岡副委員長)

“親”への支援と限定してしまっているのか疑問に思う。親でなくても子育てをしている人は大勢いる。

(野口委員長)

意味としては「子育てを現にしている大人たち」。たとえ実子でなくても、子育てをしている人を総括して“親”としても良いかも知れない。実際に子どもと日々面と向かっている人、ごはんを作っている人ではなくて、近所のおじさんやおばさんといった関係者は“地域”と置き換えられる。直接的に生活を共にしているわけではないが、大人として子どもの育ちに関心を持って参加してもらう社会が重要になる。今は、どちらかという親子の二者間でやり取りしているので、窮屈に感じられると思う。これに地域・行政をまき込んで関係性を三角形にできれば、三者関係を生み出せる。二者関係では一対一だが、三者であれば関係が3倍になる。子どもが育つことについて、二者関係ではなく三者関係を作ることができれば、お互いが楽になれる。つまり、子どもにとっては、親の目だけではなく、地域・社会からの目が増えることで、2つの目によって育てられることになる。つまり、評価が分かれることになる。親からは「ダメな子だねえ」と言われたとしても、近所のおばさんからは「とっても素直で良い子だねえ」と言われるかもしれない。このように評価が分かれることが、子どもの育ちにとって非常に重要だと考えている。教育現場もこれに当てはまる。担任が1人で、子どもとは一対一の関係になるが、そこに友達がいることで、友達からの評価と先生からの評価の2つになる。

分科会を一度開催してみて、そこでの議論がどのように展開されるかみてみたい。参考資料3-1・3-2をご活用いただいて、どういう目線で何を計画に盛り込んでいく必要があるのかを各分科会で検討してもらい、この会議に提案していただきたい。例えば、参考資料3-2の19頁に大人のモラルの低下に関するご意見があるが、これについてどうしていくかを考えてほしい。これは行政の問題ではなく、私たち自身がどういう大人として子どもに接していけばいいのかを話し合わなければいけない。

(濱内委員)

分科会には行政職員も割り振ってほしい。チームのメンバーとして参加していただきたい。

(野口委員長)

私からもそのようにお願いしたい。

それでは、分科会の分野を決めたい。とりあえず、①子どもが主人公チーム、②育てる側を育てるチーム、③地域の子育て力を育てるチームとするので、委員の皆さんおよび事務局には希望するチームの下に名前を書き込んでほしい。

図表6 分科会の割振り（暫定）

①子どもが主人公（仮）	②育てる側を育てる（仮）	③地域の子育て力を育てる（仮）
大橋了子 奥田聖人 ・ 教育部長 ・ 教育指導課長 ・ 福祉事務所長	稲垣陽子 中谷直子 松岡典子 横山悦子 ・ 教育長 ・ 保健福祉部長	伊藤香 下間賢了 高橋恵美子 津田浩二 濱内洋孝 水谷秀史 ・ 教育委員会理事

注：欠席委員は後日割振り。（敬称略、五十音順）

(下間委員)

行政職員が分科会に入ることに懸念がある。子育て会議はあくまで役所と切り離れた外部の意見をまとめることに意味があると思う。事務局の意見を聞きたいという気持ちは理解できるが、作業部会で事務局の意見が主となってしまっは困る。教育長あたりがしっかりした意見を出すと、強く言い返せる委員がいなければそれが通ってしまうと思う。作業部会での事務局の仕事は、委員の質問に対する回答役に限定した方がいい。

(野口委員長)

私はそうは思わない。事務局であっても私人として意見を持っていると思う。立場を超えて意見を言い合うことが大事。また、できる／できないを整理するのはこの会議となるので、意見を出し合う段階では事務局にもご参加いただいた方がいいと思う。

(濱内委員)

①子どもが主人公チームでは何を話し合うのか。

(野口委員長)

学童保育や保育所を始め、子ども自身がどういうふうになっていけばいいのかという

ことも含めて考えることが大事だと思う。

(水谷秀史委員)

本日欠席の加藤委員を③地域の子育て力を育てるチームに入れてほしい。

(濱内委員)

私立保育・幼稚園の委員が③に固まっているのは何故か。固まる理由があるのか。

(津田委員)

教育を扱うテーマなのでそこで意見を言いたい。

(水谷秀史委員)

制度改革が最大の関心事なので。

(野口委員長)

できれば分散してくれると、各分野で制度政策の改変も踏まえた議論ができると思うが。

メンバーは今後の変更もあり得るということで、この件については以上としたい。メンバーが決定し次第、追ってご連絡させていただく。

今後各分科会から出てくる意見が基本目標になると思うが、予定では5月の開催となっているので、それまでに今までの資料を読み込んでおいていただきたい。本会議は8月に予定されており、それまでの間に作業や打ち合わせがあるが、それについては第1回目の分科会でご説明したい。

(事務局)

8月の第3回目のこの会議までに、3回程度の分科会を予定している。

(野口委員長)

事務局説明と質疑応答の後だと、グループワークが1時間程度しかできない。グループワークをしっかりとやるという主旨でこの分科会を進めさせていただくとご理解いただきたい。

3. その他

※ 次回の日程調整等について事務局説明

4. 閉会

(以上)